

身体と喩え

——江戸の養生言説における身体認識（上）——

Body and Analogy ;

The Epistemology of Body on the Discourse of Personal Health in the Edo era(1).

片 瀧 美穂子

Mihoko KATAFUCHI

2005年10月7日受理

Abstract

This essay clarifies the epistemology of body on discourse of yojo (personal health care) in the Edo era, examining the analogies of body. The main analogies of body on the discourse of yojo from the 17th Century though the middle of the 19th Century are heaven and earth, plants and house. After the 19th Century, city as the analogy of body appears. Basically, the cosmological way of conceiving body that is drawn heaven and earth continues until the middle of 19th Century, but it gradually decreases. On the other hand, it is not until the 18th Century that the plants and the house as the analogy of the body appear. The epistemology of body on the discourse of yojo changes from the cosmological body to the object of artificial operations, the social existence and the consumed object as signs.

〔目次〕

はじめに

1 天地と身体

1. 1 天地の相似物としての身体
1. 2 気と天地＝身体

2 植物と身体

2. 1 養いの対象としての植物と身体
2. 2 人為の思想（以上、本稿）

3 家と身体

3. 1 社会的機能単位としての家と身体
3. 2 物理的構造物としての家と身体

4 喩えの飽和

4. 1 表象化、微分化される身体
4. 2 自然から人為、そして記号へ

おわりに

はじめに

十七世紀以降、戦乱の世から社会的安定へと移る中で、文字文化の発展もあいまって、安寧な生活と長寿を願う養生に関する書物が出回っていく。それは、元禄・正徳期と天保期をピークとし、版元がわからないものまで含めると百種以上におよぶといわれるほどである。養生書は、食物の取り方、酒の飲み方、住居への配慮、老人や子供への配慮、老いた者の生活法、医師の選択法、簡単な治療法、心の持ちようなどを、道德的な語りの中で非常に広範囲にわたって記述してい

る。ところで、養生書の歴史を遡ると、丹波康頼撰述『医心方』(893)の第二六及び二七巻が養生書の現存する最古とされている。ただし、十二世紀から十六世紀末までに出版された養生書は十冊たらずである¹⁾。かつて筆者は、十七世紀以降の養生書の増大に、十六世紀から十七世紀前半にかけての生へのまなざしの変容を指摘したことがあった²⁾。試し斬りや捨て子・子殺しに対する感覚の変容が、生へのまなざしの変容を示す典型的な例として挙げられる。十七世紀を通じて武士たちの中に、かつてためらうことなく行っていた試し斬りに対して、それを忌み嫌い残酷とする心性が醸成された。捨子禁令は元禄期に頻繁に出されるようになるが、この時期にとりたてて捨子が多くなったというよりは、それまで日常的に行われていた子捨て、子殺しによって奪われる生への見方が変化してきたといえた。塚本の指摘のように、十六世紀から十七世紀の中頃までにおいては、子どもの生を奪うこと、子どもを捨てることを罪悪視することは薄かったのである³⁾。江戸時代の養生の言説は、こうした十六世紀から十七世紀を通じての生へのまなざしの変化を経ている。江戸時代の養生の言説は、身体を社会的な存在として位置づけ、安寧な生活の維持と長寿を願う意志、生の安定の意志に貫かれている。十九世紀後半、こうした江戸時代の養生の言説に大きな変換がもたらされる。養生の言説は、気の循環と充満を語らなくなるのである。解剖学や生理学を基礎とした近代医学的知識によって構成され、身体に関しては、現代まで続いている諸概

念で把握されていくようになる。解剖学的な知識が、拡大を見せるのは、周知のとおり、杉田玄白らによる十八世紀末の『解体新書』の出版を契機とする。しかしながら、養生の言説においては、一部には解剖学的な知識を取り入れた養生論も存在するが、多くの養生の言説は、解剖学的な知識をとり入れることよりは、日常的な実践道徳としての身体への配慮を説いている。

さて、十七世紀から十九世紀中頃までの養生の言説は、このような江戸時代の養生の言説において、いかなる身体認識がなされたのか、筆者の問題関心である。養生において、身体はいかなる思考のあり方によって言説化されていたのか、あるいは、いかなる言説化のあり方によって身体は思考されたのか。ここでの身体認識とは、言説上にさまざまな関係の中で織り出されてくる歴史的な、あるいは結果として歴史をつくり出すようなものである。養生の言説は身体の良い状態を求めるものであるため、身体が別のものに喩えられるのは、基本的には身体や養生のより進んだ理解のため、当該の養生の言説の正当性を強めるためだといえよう。天地や植物や家は、いかにして喩えの対象となりうるのか。身体の喩えは、いかなる認識な布置によってもたらされているのか。現代のわれわれにとっては、身体と天地が、身体と植物が、あるいは身体と家が、それぞれに含まれている要素の直接的な類似性や、構造上の類似性があるとの実感はない。しかし、江戸の人々にとっては、そういう実感があつた。少なくとも身体を天地に、植物に、家にそして都市に喩えることは、養生の言説において受け入れられるものだったのである。

これまで江戸時代の養生や明治以降の衛生に関連する身体観の研究は、さまざまななかたちで行われてきたが、身体の喩えに焦点づけたものはない。しかし、江戸時代の養生言説において、病や養生のあり方、身体が多様な喩えによって言い換えられていることを見ることができる。その中でも、十七世紀から十九世紀中頃までの養生論において身体が主に喩えられるものは、天地、植物・水田、家であった。十九世紀になるとさらに都市にも喩えられるようになる。天地を身体にたとえるという、コスモロジカルな身体の把握の方法は、相対的には徐々に減少していくものの、基本的には近代医学を基盤とする近代の衛生論が登場する十九世紀中頃まで、養生の言説の中に登場し続ける。他方、身体の栽培される植物の喩え、養生や身体の水田の喩えは、十八世紀を待たないと殆ど登場してこない。また、身体の家を喩える、それが社会的な構成単位としての家であれ、物理的な建築物としての家であれ、十八世紀以降にならないと見つけることができない。十九世紀以降、これら天地、植物・水田、家に加えて都市にも喩えられるようになるが、これらの喩えは、

さらに錦絵などに視覚的に表象されるようになる。本稿の目的は、十七世紀から十九世紀中頃までの養生言説における、天地、植物・水田、家、そして都市を含んだ多様な身体喩えの表象、これらを考察の対象として、その認識的な布置を明らかにすることである。

1 天地と身体

1. 1 天地の相似物としての身体

養生の言説は十七世紀以降多く登場しているが、その中に天地と身体の相似性を語る言葉を見つけることができる。身体=小天地、ミクロコスモスとしての身体という図式は、「人は天の小宇宙であるとし、天(自然)と人間世界との間に相関関係があるとする考え方」⁴⁾とされる、いわゆる天人相関説の典型である。あるいはそれは、万物を気の生成物と捉え、事物や事象の生成や構造を解明する運氣論においても、認められる図式であるだろう。身体と天地の相似性において最も多いのが、頭一天、足一地の関係であり、しばしば同時に背一山が語られる。江戸時代の養生書の嚆矢とされる曲道瀬玄朔『延壽撮要』(序 1599)には以下のような記述がある。

夫人の一身は天地のごとし。頭のまろきは天にかたどり、足の中なるは地をかたどる。眼は日月、毛髪肉は山林土石、呼吸は風、血液は河海、四肢は四時、五臓は五行、六腑は六津かくのごとく皆天地にかたどる。ゆえに起居動静天地にしたがふを要とす。日出動作し日入りて休息すべし。又春夏は天地の気のほりうかびて草木の花葉も茂盛し、虫獣も飛動す。秋冬は天地の気くらくしづみて草木も根に帰し、巢居に入る。人も其のごとく、春夏は頭をも動し神気をもうはしめ、秋冬は頭をも静にし神気をもしづましむべし⁵⁾。

沢庵の養生書である『骨董録』も、この『延壽撮要』における身体の天地への喩えと同様の、天地と身の相似性を語っている。

人の身は、天地の中の小天地成。人の身、天地にかはる事なし。一身の精華上て両眼となる。陰陽の精なり。天に有ては日月也。頭のまとなるは、天の圓きにかたどる。四支は地の四方なるにかたどる。背は北なり、山にかたどる。天下の山、北にあり。昆崙山北にありて、水是より流れ出る。黄河九曲出昆崙といへり。是山北にあたりて。水是より出て、南にむかひ、流れて東海に入。人の背は北にとる。腰は腎のかかる所にて、水愛いわく。腹は南なり。腰より前にめぐつて膀胱の腑へ下る。是天下の水。北の山より出て、南をめぐり東海へ入がごとし⁶⁾。

同じく沢庵の『医説』では、こうである。「人は、天地

の内の小天地也。天地をちいさくつくりたる物也。たとへば九ついれこのまるき器のごとし。大小はかわれ共、器は同じて、そとをまはせば、内ともにまはるごとく、人の身はちいさけれど、天地にかはる事なくして、天地がめくれば人の身のうちも春夏秋冬のごとく」⁷⁾。人とは天地を小さくつくったものだという。十八世紀前半の江戸時代の百科辞典とも称される寺島良庵『和漢三才図会』(序 1712)の中では、「人身は天地に法る」の項目があり、同様な記述を残している。「按ずるに、頭は則ち天、足は則ち地、骨は則ち石、肉は則ち土、筋は則ち道路、毛髪は則ち草木、両眼は則ち日月、血は則ち海水、息は則ち風、二便は則ち雨、汗は則ち露の類。古人概ね之を言ふ所なり」。十九世紀前半の八隅景山『養生一言草』(1810)でも「夫人は即小天地の如し、いかんとなれば、頭は天にして、足は地也」⁸⁾というように、身体＝小天地という、身体と天地の相似性が語られている。高井伴寛『姪事戒』(不詳)でも同様の、「人は天地の形象を備て生るゆへ、小天地といふ、天窓の圓は天に象り足の方なるは地に象り、背を山とし、腹を海とし眼を日月とし、呼吸の息を風とす」⁹⁾という記述がある。平石の指摘によれば、身体＝小天地という身体の相似性は、養生の言説に限定されるものではなく、林羅山、熊沢蕃山、石田梅石の記述にもみられる¹⁰⁾。

1. 2 氣と天地＝身体

身体がマクロコスモスに対するミクロコスモスとされるためには、天地と身体に共通する存在の様態なり、構造なりが存在する必要がある。身体を天地の相似物としての把握と結びつけていたのが、氣の概念である。実際、十九世紀後半における養生の言説からの氣の概念の消失は、ミクロコスモスとしての身体の記述がなくなることと同時的に生じている¹¹⁾。山田慶兒『朱子の自然学』に拠りながら、この氣について整理をしておこう。山田によれば、氣とは次のように説明される。

形而下の存在、もっと厳密に言えば、自然的世界を構成する物質的基体を、朱子は氣と呼ぶ。氣は形而上の存在である理とならぶ、かれの存在論の基礎概念であり、一氣・陰陽・五行の三つのカテゴリーによって把握される包括的な存在概念である。…存在論的観点からいえば、氣は物質＝エネルギー、あるいはエネルギーを内在する物質であり、一氣・陰陽・五行は生成論的な関連に立つ¹²⁾。

ただし、氣は朱子が特殊に使用した用語というよりは、もともと宇宙の生成論に関しては、世界が形成される以前に、原初的な物質であるところの氣が混沌の状態で存在し、その氣が自身を含んだ天地となり、天地二氣の作用によって万物が生じるといふ、揺らぐことの

ない普遍的な神話が中国にはあった¹³⁾。混沌した状態から氣の動きによって天地の事物が生成されてくるといふ、この物語に類似した話が、沢庵の養生書『骨董録』にも見られる。「天地のはじめに混沌と云あり、之を名付て混沌王と云。混沌王は、形なければ、目はなくちと云こともなし。しかるに氣と云ふ物うごきて、陰陽出来、陰陽の二氣まじわりて、七日の内に七竅生したり」¹⁴⁾。混沌王は、七日間のうちに七つの穴が形成されると同時にいなくなったとされるのだが、いずれにせよ、十六世紀後半から十七世紀前半に生きた沢庵は、こうした天地生成の把握をしていたことになる。

貝原益軒『養生訓』の記述に、「養生の害二あり。元氣をへらす一なり。元氣を滞らしむる二也」とあるように、非常に簡単な言い方をすると、養生では物質＝エネルギーである氣を満たしめぐらすことが眼目となる。再び益軒を引用すると、「陰陽の天地にあつて、流行して滞らざれば、四時よく行はれ、百物よく生る。偏にして滞れば、流行の道ふさがり、冬あたたかに夏さむく、大風・大雨の変ありて、凶害をなせり。人身にあつても亦しかり。氣血よく流行して滞らざれば、氣つよくして病なし」¹⁵⁾。氣が十分に満たされていれば、その身体は安定的な存在となり、エネルギーとしての氣がめぐることによって調和のとれた身体となる。氣は天地萬物の構造、生成に関わっており、その運動は、陰陽、五行(木・火・土・金・水)、相生／相克といったいくつかの規則をもつ。気象や気候は、文字どおり氣の運行によるものである。気象や天候は、これらの規則を組み合わせながら解明されようとした。医学へ適用される場合は、その適用には思考上の操作が多少加えられることになる¹⁶⁾。江戸時代の養生論は、医学的な理論に基づいたものというよりはむしろ、日常実践の道徳的な語りでもある。養生書の著者は、医家である場合も多いのではあるが、広く読まれるように安易な言葉で、実際の生活に即して記述される。そこでは、氣の理論を適用した医学的な知識をもとにして、氣の理論に厳密によりながら記述されることは、あまり期待できない。理解を得やすいように、氣の理論からいえば妥当ではない喩えや説明をしているかもしれない。身体が天地に喩えられ、それを可能にしていたのが天地と身体とをめぐるといふ氣の概念であったとしても、養生の言説の中に氣の運用の規則を探るよりはむしろ、身体の天地への喩えがいかになされ、それがいかなる身体把握なのかに留まって考えたい。実際、養生の言説において五行の相生・相克の説明を行っているものは数少ない。平易な言葉で記述され専門家ではない人々の読書を想定した養生の言説の中で、五行における相生・相克の議論を展開しているのは、沢庵『骨董録』であるが、この他には見当たらない¹⁷⁾。

さてここで、先に引用した曲道瀬玄朔『延寿撮要』¹⁸⁾、沢庵『医説』および『骨董録』、寺島良庵『和漢三才図

絵』、八隅景山『養生一言草』から気の運行と養生の関連を取り上げてみよう。『延壽撮要』における身体と天地との対応関係はこうであった。頭一天、足一地、眼一日月、毛髮一山林、肉一土石、呼吸一風、四肢一四つの時、五臓(腎、肝、心、肺、脾)一五行、六腑(大腸、小腸、胆、胃、三焦、膀胱)一六つの場所。沢庵『医説』では、頭一天、眼一日月、四肢一四方、背中山となる。そして、寺島良庵『和漢三才図絵』では、頭一天、足一地、眼一日月、毛髮一草木、肉一土、骨一石、呼吸一風邪、二便一雨となっている。天地と身体との対応関係において、三者がすべて同じであるわけではない。四肢は四つの時ともされるし四方ともされている。ただ頭一天、地一足という骨格だけは、揺らぐことはない。天地の物質＝エネルギーである気によって生成されているという身体把握のため、季節や気象という気の運行による自然的世界の変化に応じた養生のありようが求められる。その後も版を重ねて出版されることになる『延壽撮要』は、身体の天地への喩えに続けて記述する。

起居動静天地に従うを要とす。日出て動作し日入りて休息すべし。又は春夏は頭をも動し神気をもうはしめ、秋冬は頭をも静にし神気をもしづましむべし。かくのごとくならば気血和順にして筋骨の病生すべからず(中略)冬夏によらず俄に大風震電して天地のくくなるは諸龍鬼神の行動するなり。其時外に出てこれにあたるべからず。室に入て戸をとじ焼香して心をしずめこれをさくべし¹⁹⁾。

月もまた、時間概念とむすびついた気の運行として考えられるが、『延壽撮要』では、暦に応じた日常の行動をこまかに示している。沐浴の適切な日、避けるべき日などを挙げ、また一月から十二月まで月毎に禁じるべき食物、そして「交会忌日」を記述している。こうした季節毎の養生、天候や気象に応じた養生は、『延壽撮要』に限ることなく、江戸時代の養生書において散見できる²⁰⁾。例えば、名古屋玄醫『養生主論』には、「四季の身の持やう」の項が立てられて、それぞれの季節と気の有りように言及している。貝原益軒『養生訓』にも、「春は陽気発生し、冬の閉蔵にかわり、人の肌膚和して、表気やうやう開く。然るに余寒猶烈しくして、風寒に感じやすし」²¹⁾という記述がある。八隅景山『養生一言草』も、「年中養生」の項をたて養生に関する行事を月ごとに記述している²²⁾。

身体の構造が天地＝宇宙のそれと同じものであり、天地万物を生成する物質的エネルギーである気が、身体を貫き構成している。貝原益軒『養生訓』の記述は、こうである。「人の元氣は、もと天地の万物を生ずる気なり。是人身の根本なり、人此氣にあらざれば生ず」²³⁾。こうした養生言説における身体と天地、気との

関係からもたらされる身体把握においては、養生という営みは、一日の中での時間の経過、季節の経過、気象・天候の変化といった気の運行に応じることであった。身体の良い状態をもたらすのは、身体それ自体ではなく、あくまでも気との関わりである。養生という身体の配慮は、時間の経過、季節の経過、天候の変化への注意を向けるということでもある。そこでは、身体それ自体に変更を加えて、良好な状態をつくり出そうとすることにはならない。そのため、身体それ自体についてあるべき形態の大きさや、測定値という考えは生まれにくい²⁴⁾。ある一定の数値や形態を是とし、そこからの逸脱を矯正の対象、病と見ることとは違う。天地一身体の喩えは、身体がその形態や数量化されたかたちで視覚的に把握されることよりも、身体は気象や天候、季節、暦との関係に対応することが求められた。

2 植物と身体

2.1 植物のたとえ

身体の天地の喩に加えて十八世紀以降出てくるのが、身体、植物や水田の喩、特に人為的に育てる植物と、養いの対象となる身体との喩である。農業であれ園芸であれ、これらは、自然性を人為的なものに変容したものであり、万物生成の根源の時空間としての天地の概念からすれば、コスモロジー性は薄れている。ただし、気象や天候、季節によってその存在や状況が大きく左右されるという意味では、天地の気のありように対応しなければならないだろう。養生の言説における身体、植物の喩えにおいても、身体と植物をつなげているものが、気概念であった。養生のための気のあり方を、草木や水田の状況を引き合いにして論じていくのである。たとえば、貝原益軒『養生訓』では、春の気のありようへの対処はこう語られている。「春は陽気発生し、冬の閉蔵にかはり、人の肌膚和して、表気やうやう開く。然るに余寒猶烈しくして、風寒に感じやすし。つつしんで、風寒にあたるべからず。感冒・咳嗽の患なからしむべし。草木の発生するも、余寒にいやみやすし、是を以て、人も余寒をおそるべし。時にしたがひ、身を運動し、陽気をめぐらして、発生せしむべし」²⁵⁾。ここでは、春先に芽吹いた植物が余寒にいたみやすいのと同様に、春になったとはいえ、風と寒さを避けるようにと勧められている。第1節で述べたように、身体が天地に喩えられる時、頭が天、足が地、背が山、四肢が四方、骨は石などのように、身体の部位が自然的空間に対応して語られた。これに対して、草木や水田に身体や養生が喩えられる時には、身体の部位が草木や稲、水田の部分や機能に喩えられるわけではない²⁶⁾。そこに身体＝植物という図式を見いだすことはできない。また、気を養うことは、水田をつくるように、植物を育てるようにしなければならない

いと説かれても、陰陽や五行、相生・相克といった気の運行の原理や概念を用いて、説明が加えられるわけではなかった。

十六世紀最末期の曲道瀬玄朔『延壽撮要』、沢庵『医説』および『骨董録』、十七世紀前半『養生主論』には、前節で引用したように、身体の天地への喩えや、気の運行による季節の変化と身体との対応が、記述されている。しかし、身体の変化や調子に配慮し、食事や房事に気遣う身体の養い方が、人の手による植物の栽培法・生育法と重ねられることはなかった。確かに、曲道瀬玄朔『延壽撮要』には、以下のように、動物、植物、人間ともに天地において同様に生命を与えられ、生かされている存在として示されている。「春夏は天地の気のごりうかびて草木の花葉も茂盛し、虫獸も飛動す。秋冬は天地の気くらくしづみて草木も根に帰し、鳥獸も巢居に入る。人も其ごとく春夏は頭をも動し神氣をもうはしめ、秋冬は頭をも静にし神氣をもしづましむべし」²⁷⁾。しかし、ここでの人と草木は、人為的な養生法あるいは生育法・園芸方法の対象としてのそれではない。先の益軒『養生訓』や八隅景山『養生一言草』のような、人為的な栽培・生育の対象とはいえない植物への身体喩が、十八世紀以降無くなるわけではないが、いずれにしても、十八世紀以降、養生の言説における身体は、人の手を加えて生育をさせるべき植物、水田と重ねられ語られ初める。

貝原益軒『養生論』は、園芸において手間をかけるように、またはそれ以上に、自分の身体を愛せよと説く。「園に草木をうへて愛する人は、朝夕心に掛けて、水をそそび土をかひ、肥えをし、虫を去て、よく養ひ、其さかへを悦び、衰へをうれふ。草木は至りてかろし。我が身は至りて重し。豈、わが身を愛する事、草木にもしかざるべきや。思わざる事甚し」²⁸⁾。養生では、気を身体に満ちさせめぐらすことが肝要とされるが、その気に関する部分で植物への喩えが登場する。身体における気は、草木における水と肥料との関係に喩えられている。「人の元氣は、もと天地の万物を生ずる気なり。是人身の根本なり。人、此氣にあらざれば生ぜず。生じて後は、飲食、衣服、居処の外物の助によりて、元氣養われて命をたもる。飲食、衣服、居処の類も、亦、天地の生ずる所なり。生まるるも養はるるも、皆天地の恩なり。外物を用いて、元氣の養とする所の飲食などを、かろく用ひて過ぎざれば、内の元氣、外の養にまけて病となる。病おもくして元氣つくれば死す。たとへば草木に水と肥との養を過せば、かじけて枯るるがごとし」²⁹⁾。天地の気の運行による人の生成が語られて、気的重要性を確認している。そして、飲食、衣服、住居によって生を保っているが、それらを過ぎてしまえば、逆に病となってしまう。草木に水と肥料をやりすぎてしまうと枯れてしまうように、と述べている。さらに、気の養いは田を作るよう

なものだとされる。「元氣を養ふべし。元氣を害する物は内慾と外邪となり。すでに元氣を害するものをさらば、飲食・動靜に心を用て、元氣を養ふべし。たとへば田をつくるが如し。まづ苗を害する莠を去つて後、苗に水をそそぎ、肥をして養ふ。養生も亦かくの如し。まづ外を去つて後、よく養ふべし。たとへば惡を去つて善を行ふがごとくなるべし」³⁰⁾。元氣を損なうものを無くしてから、その後で元氣を養うことが、稲を作るようなものだと述べられている。貝原益軒『養生訓』には、この他にも育成の対象としての植物を指しているのか、そうではないのかの判断がつきにくい箇所があるが、いずれにしても身体の草木の喩えがしばしば登場している。

貝原益軒『養生訓』と同時期に出された香月牛山『老人必要養草』(1716)は、風寒暑湿に対する老人の身体を風に対する木のあり方に、そして、滋養の薬の取り方と草木への水のやり方に、対応させている。「六十有餘になれば陰血ことごとく涸て補陰の劑をうくべき所のあいてなし、たとへば草木の枯んとする時、又はかじけたときに水そそぎ培ひなどすればその草木もとのごとくになる、己に草木稿る勢ひ極りて生氣なき時、水そそぎ培ときはかへつてはやく腐損するにあらずや、老人血分涸りて脾胃かはき皮膚皺みて、一元の真氣のみながらふ人は稿たる木のうるほいなくて、枯幹になり土中に根ありてたつに同じ」³¹⁾。植物が枯れていく時期と、人間の老いる時期とが重ねあわせられている。本井了承『長命衛生論』も田畑の管理法を引き合いに出しながら、養生法を述べる。

百姓田を作るに、九月には實入あからみかれるなり、是費との天然の盡期に同じ、然に田も尿の養程すれば、實入もよく、あからむ事の延ておそく成て葉青し、是壽命の延るにひとし、又麥は四月に實入あからむ、然に瓜をうゑるには、麥のあからむまへに麥のあいあいこやし、瓜に尿を入に、程なくあからみ、枯麥瓜のこやし、麥のやしなひと成、麥若やぎ葉青々と成、あからむ事おそくなる、是尿の養を得るゆへに長生する道理なり、まして人たる身も大食大酒色道を慎、心身を程よく遣ひ、身を大事に保養するならば、長生きする理あきらかなり³²⁾。

肥料を作物にやることと保養とが、喩えとなっている。飲食、飲酒の摂生、適度な運動などを行い保養すれば、長生きするということの妥当性を、農作物の肥料の効果による発育の良さによって導いている。杉田玄白『養生七不可』は、部分的に解剖学的な知識が取り入れられているが、そのことと身体を植物に喩えることとは、相反するものではなかったようである。「夫人の生れながらにして、強弱のあるは草木と同じ時節に種をくだし同じやうに培ひ同じ畠に生じて肥瘦あるが如し、能

生長すると能生長せざるは、其種によるなるべし、然れどもそれ相應に花咲實のり、秋に至りて枯るる所は同じことなり」³³⁾。人が生まれながらに強い人と弱い人があるのは、同じ時期に種をまき、同じように育てても、同じ畑であっても、肥えたものと痩せたものがあるものができるようなものだとして述べている。

このように、養生の言説における身体の植物の喩えは、植物の生育上あてはまることは身体にもあてはまる、という前提がどこかに存在し、養生の有効性や期待を裏付けるものだった。十八世紀以降、養生の言説に身体の植物への喩えが、いかにして登場するようになったのであろうか。植物の生育を促進、安定させる技術と、身体への配慮である養生の技術とには、いかにして一致点が見い出されたのだろうか。植物の生育法・栽培法における効果の説明は、いかにして、養生の効果の妥当性を与えうるものになったのだろうか。

2. 2 人為的思想

前述したように、江戸時代の養生書は、十七世紀後半以降、市中に出回っていくようになる。曲道瀬玄朔『延壽撮要』、香月牛山『老人必用養』、貝原益軒『養生訓』などの主要な養生書は、江戸時代を通じて何度か再版されている。そして、これらを含めた多くの養生書は、都市の産物でもあった。十九世紀以降になると、農家の家訓や教導書などにも登場してくるようになるが、それまでは読者はまずは武家階層であり、そして町人であった。十七世紀後半以降の養生の言説の増大は、貨幣経済の進展を背景にした都市生活の成立を背景にしており、養生の言説は都市に住む者に向けられていることが多かった。あらゆるものを金銭によって享受できる都市の生活においては、田舎の生活から比較するならば、美食や過食、また多量の服薬や過度の鍼灸などがなされていた。田舎の者、貧しい者の生活をまねることが、養生に通じるとされた。

前項において、十八世紀以降の養生の言説の中で、身体が植物や水田に喩えられることを指摘した。では、喩えられる植物や水田に関する技術や知識の動向は、どうであったのだろうか。農業技術に関する農書は、十七世紀後半以降登場し、多数のものが残されている。戦国大名にとって飢饉対策は、政治的課題であり、水田の拡大や領地内の安定のために灌漑事業が進められた。十六世紀から十七世紀初頭は、そうした灌漑事業が整備されていった時期である。継起的に農業技術も進展していく。例えば、葉山によれば、17世紀後半になると、畿内の農村に新たに細千石、唐箕、千齒扱、唐弓などの道具が使用されはじめる³⁴⁾。相次ぐ農書の刊行は、農業技術と知識の深まりと拡大の一躍を担った。十九世紀初頭以降になると、農民自身の書き残した多数の農書も出現する。他方、都市の農書といわれるのが、園芸書である。園芸書は、農書と同時期の十

七世紀後半に登場しはじめる。農業における品種改良の技術が園芸をささえ、隆盛させた大きな要因だった³⁵⁾。江戸時代の園芸の始まりは、武家の屋敷の造園に由来している。各地方の植物は、参勤交代により江戸へ流入し、また他大名への贈答品ともなった。元禄期・享保期には、町人の経済的台頭の中で、園芸は拡大し、鉢植えや盆栽が生み出された。園芸書は、都市の生活の中で、珍しい色や形を追求するための、技術を提供していた。

種から芽を出させ成長させていくこと、適した時期に適した方法によって株を増殖させること、好みの形に成形しながら成長させていくこと、こうした植物の栽培や生育は、その身体のはじまりから成長させていく小児の養育法に繋がっていく。人為的に手を加えることによって、どちらもその成果があらわれるのである。植物は人為的に変更可能なものとなる。身体が植物に喩えられることにより、身体もまた変わるといふ言説が生まれる。幼いころから養育法、養生法に従えば、理想的な人間に成長すると説かれる。養育書においてもまた、植物の栽培法、生育法が養育の喩えとして登場する。上杉治広の後見役に服した時に、輔導の心得として侍臣に示した上杉鷹山『蒙養訓』には、こう記述されている。「未だ幼稚の事に候えば、今日の上は先ず曲節を生ぜず、春陽に草木の枝葉を長じ候如く、唯ぞわぞわと(元気に)成長致され候事、第一なる事に候」³⁶⁾。医家による養生書でもある香月牛山『小児必用養育草』の記述は、こうである。「つねに一つの例えあげて、養育の道にうとき人をさとず、いま、木を植うを見よ。分寸の苗を植えて、その木、尺に余るまでの時を、よく培い水そそぎ、虫・蟻などの災いなきようにして、その芽を折ぬように心を付けて、二、三尺までもそ育てぬれば、その後は大抵にしても、その木かならず合抱ほどの大木となる」³⁷⁾。養育に疎い者に説明するために、木の植え方を引き合いに出すという。植物の栽培法は、こどもの養育法の喩えとしては、まさに適するものだったのである。人為的に手を加え理想の形へと整えていく、それは成長してからよりも幼い頃の方が望ましい、こう語るのは小川玉川『自修編』である。

さて、小児を教育することを樹木に譬う。それ樹木は、始生の時なれば性質柔軟にして、枝を曲げて円坐にたどり、幹を撓めて物の状を作る。意の向かうところに従いて人工を施すこと、自由なり。やや長大に至りては、人工施しいがたし、その枝幹の向きを直し、態を易えんと欲すれども自在ならず。人もその通りなるものなり。幼稚の時に在りては、人に随うこと自由にして、教育施し易し。漸々に物心つくに随いて、己が捏造を用い偽りまじえ、老成の善言・格言を用いず、自己の為すことを善と思うに至る。ここに至りては、

なかなか一通りの教侮にて間に合い兼ねるものなり。樹木・人物ともに、いかにも始生童蒙の時に、養を貴ぶこと、かくの如し³⁸⁾。

樹木が小さい時は、柔軟であるから、かたどることも容易で人為的な育成が可能だという。樹木も人も幼い頃に身につけた方が好ましいというのである。

実は、当の農書や園芸書においても、身体喩えが登場している。養生書では、植物の栽培法生育法と同じことを引き合いに出しながら、その養生法の妥当性を主張したが、逆に、農書や園芸書では、身体への配慮の方法、養生の方法を引き合いに出しながら、栽培法の正当性を強める記述が出てくる。そのことは、養生の知識が都市だけではなく、地方にまで拡大していた十八世紀末以降に生じてきているようである。細井宜麻『農業時の采』(1785)は、綿の栽培法に関して、芽吹いた綿に肥料を与えすぎるとは逆に良くないということを、産後の人間に喩えて述べている。「又産生立あしき綿を、糞して延さんとするハ、自然にあらざる故に、難にもあふ也。縦ハ産やつれしたる人にうまき物多くくわせ、急に成仁させんとするにひとし。反て病身になるもの也」³⁹⁾。ここでは、食事の取り方と肥料とが喩えられているが、身体を養う食事と植物を養う肥料との類比は、比較的よく登場する。大蔵永常『農稼栽培論』(1826)にも、その記述を見つけることができる。「同じ人間五穀を食らうものにも、黍・稗計りを常の食とするに、美食せしむる時ハ肥腴するが如く、草木も能く糞壤を施せば、肥ええて其実も味ひ美なり。然れども常に美食を過すものハ、病を生じ、瘡を發し、或ハ積聚となるがごとく、草木に肥えを過せば、唯枝葉のミ茂えて実少なし。又は葉枯れ虫喰いて自ら朽る也」⁴⁰⁾。ここでは、糞壤を施せば作物はよく肥え味もよくなるが、人間が美食しすぎると返って病になるように、草木に肥えをやり過ぎると枝葉ばかりが栄え、実は少なくなってしまうか、葉が枯れるか虫が喰って衰えてしまうという。別の箇所でも、魚灯の肥料について、人の飲食を喩えに出しながら記述している。「草木・生類とも其身に持てる油ありて、肥となる、然れとも魚灯の煎がらハ、却生干よりハよく、油糟を上手に絞て、油のよくぬける事を好とするを以てみれば、油多き却よろしからず。人も麤食すれば、骨肉丈夫にして無病になり、美食ハ病を生ずるの元となるが如し」⁴¹⁾。そして、以下のように語られる時、農書と養育書の区別はつかないかのようなのである。「人も草木も同じことわりにて、初めが大事なり。教児嬰孩教婦初来とて、人間も是に同しく、小児の時より悪敷枝ハ切捨、或ハたへめ曲げて、忠孝の道を教へ、鉢植の木のように育れば、よき人になる也」⁴²⁾。農業技術、園芸ともに、自然の営みを人工的に変形したものである。園芸において好まれたものは、斑入り、奇形といった珍品

であった⁴³⁾。それらは、周到に手間をかけて、人為的に意図する形態や色へと変容させられた。本来、自然的世界の産物である草木に、人為的に手を加えるのが、園芸であった。養生の言説と、農書・園芸の言説とは、ここにおいて一致する。身体あるいは草木の成長、変化に配慮し、天候や時期との関連を考え、理想的な形態、理想的な身体の状態を追求する。江戸時代には、農業技術の進展と、それを基礎とした世界的にも高度な園芸技術が生み出された。天候や季節などによる身体の変調を伺い、飲食・飲酒、房事を養生の観点から摂生し、気持ちを安寧に保ち、身体を動かすことを心掛けよと説く養生の言説は増大していった。こうした養生の身体への配慮によって、延命や身体の調子の良さをもたらすことが当然のこととされた。身体は変更可能なものとされるのである。養生の言説における身体植物への喩え、農書や園芸書における植物の身体への喩えは、身体や植物の人為的な変更可能性を高めることになったのである。

註

- 1) 養生書の刊行状況については、瀧澤利行『近代日本健康思想の成立』大空社、1993、を参照されたい。
- 2) 拙稿「江戸養生論への道行き」『スポーツ史研究』16号。
- 3) 塚本学『生類をめぐる政治』平凡社、1993、258頁。
- 4) 子安宣邦監修『日本思想史辞典』ベリカン社、2001、371頁。
- 5) 曲道瀬玄朔『延壽撮要』(古典養生書名著選) 出版科学総合研究所、1979、4頁。
- 6) 沢庵『骨董録』5頁(『沢庵和尚全集 巻5』沢庵和尚全集刊行会、1929。)
- 7) 沢庵『医説』5頁(『沢庵和尚全集 巻5』沢庵和尚全集刊行会、1929) カタカナをひらがなに変更した。
- 8) 八隅景山『養生一言草』三宅秀、大沢謙二『編日本衛生文庫第1輯』日本図書センター、1979、261頁。
- 9) 高井伴寛『姪事戒』三宅秀、大沢謙二『編日本衛生文庫第5輯』日本図書センター、1979、317頁。
- 10) 平石直昭『徳川思想史における天と鬼神』『アジアから考える7』東京大学出版会、1994、255頁。
- 11) 拙稿「養生書・衛生書における近代医学的知識の導入と身体観の変容」『スポーツ哲学研究』1998年1-12頁
- 12) 山田慶兒『朱子の自然学』岩波書店、1978、14頁。
- 13) 同書、15頁。
- 14) 沢庵『骨董録』(『沢庵和尚全集 巻5』沢庵和尚全集刊行会、1929、12頁。)
- 15) 貝原益軒『養生訓・和俗童子訓』岩波書店、1968、40頁。
- 16) 気の運行の規則に関しては、山田慶兒『朱子の自然学』岩波書店、1978、山田慶兒『気の自然像』岩波書店、2004を、また道教および中医学における身体観については、石田秀実『気流れる身体』平河出版社、1985、石田秀実『中国医学思想史』東京大学出版会、1992を参照されたい。
- 17) 沢庵『骨董録』(『沢庵和尚全集 巻5』沢庵和尚全集刊行会、1929、5-6頁。)
- 18) 曲道瀬玄朔『延壽撮要』(古典養生書名著選) 出版科学総合研究所、1979、4-5頁。
- 19) 貝原、前掲書、119頁。
- 20) 八隅景山『養生一言草』三宅秀・大沢謙二編『日本衛生文庫

- 第1輯』日本図書センター、1979。
- 23) 貝原、前掲書、27頁。
 - 24) 実際、養生の言説において、あるべき身体の形態の大きさ、および数量化された身体の部位についての記述は、みあたらない。ある一定の数値や形態を是とし、そこからの逸脱を矯正の対象、病と見ることとは違う。
 - 25) 貝原、前掲書、119-120頁。
 - 26) 安藤昌益は、身体の構造と稲の構造を一致させてとらえているが、安藤昌益の身体観については本稿の範囲を大きく越えており、ここでの言及は避けた。
 - 27) 曲道瀬、前掲書『延壽撮要』4頁。
 - 28) 貝原、前掲書、25頁。
 - 29) 貝原、前掲書、17頁。
 - 30) 貝原、前掲書、34頁。
 - 31) 香月牛山『老人必用養草』三宅秀・大沢謙二編『日本衛生文庫第2輯』日本図書センター、1979、85-86頁。
 - 32) 本井了承『長命衛生論』三宅秀・大沢謙二編『日本衛生文庫第4輯』日本図書センター、1979、259頁。
 - 33) 杉田玄白『養生七不可』三宅秀・大沢謙二編『日本衛生文庫第1輯』日本図書センター、1979、89頁。
 - 34) 葉山楨作「農書からみた近世農業技術」『日本の近世4』中央公論社、1992、196-198頁。
 - 35) 君塚仁彦「近世園芸文化の発展：その背景と担い手たち」『日本農書全集 第54巻』農文協、1995、6頁。
 - 36) 上杉鷹山『蒙養訓』(1796) 山住正己他編注『子育ての書2』(東洋文庫) 平凡社、1976、115頁。
 - 37) 香月牛山『小児必用養育草』(1703) 山住正己他編注『子育ての書1』(東洋文庫) 平凡社、1976、290頁。
 - 38) 小町玉川『自修編』(不詳、十九世紀前半?) 山住正己他編注『子育ての書2』(東洋文庫) 平凡社、1976、165頁。
 - 39) 細井宜麻『農業時の菜』『日本農書全集 第40巻』農村漁村文化協会 1999、112頁。
 - 40) 大蔵永常『農稼肥培論』(1826)『日本農書全集 第69巻』農村漁村文化協会 1996、31頁。
 - 41) 同書、35-36頁。
 - 42) 同書、44頁。
 - 43) 「このような奇形化した園芸植物の創出は、単に朝顔だけではなく、後にふれたいと思うが、さまざまな園芸植物にみられた共通の現象であった。そしてそれは、椿・菊・つつじ・さつきなどのように江戸初期から元禄にかけて流行したものもあった。後期には『からたちばな』をはじめ、多くの奇品草木が園芸界をにぎわした。なかにはそれが三都のような大都市だけでなく、かなり広い地方にまで普及して熱狂的流行現象を見せたものさえあるのである」。西山松之助「嘉永文化試論」『西山松之助著作集 第四巻』吉川弘文館、1983、51-52頁。